

# 感情経験の「存在論的」意味

——強制収容所における感情経験を事例として——

崎山 治男

本稿の目的は、強制収容所における収容者が感情麻痺へと至る過程を分析することを通して、個人がその自己を構成する際に感情経験が果たす役割を分析することにある。このために、まず従来の全制的施設論を批判的に検討する中で、感情経験が収容者に果たした役割を確認する。その上で、否定的な自己感情を中和し、自己感情への起源感を保持する試みである感情操作が挫折していく過程を検討する。以上の試みを通して、否定的な自己感情の中和と自己感情への起源感の確保が、自己像の構成に果たす役割を指摘する。

## 1) 本稿の問題設定——感情経験・自己・感情麻痺

“まず、ある状況に対して、自分がどう感じているかを正直に知らなければなりません。それから、自分の価値観が何かと言うこともね。そして今感じていることと自分の価値観がどう関係するのかを明らかにしなければなりません。” [Bellah, R. N. 1985=1991. p. 155]

これは現代アメリカ社会におけるあるセラピストの語りである。ペラーは、個人のライフスタイルのあり方として、功利主義的自己と表現的自己とを対比し、後者の浸透を主張する。ここで呼ばれている「表現的自己」とは、仕事や事業での成功に費やされるフランクリンの禁欲に比して、自己の感情やライフスタイルの「自由な」表現等を重視する自己である。ペラーは、感情経験の表現・管理の技法を日常知として伝えるセラピー文化の担い手に、表現的自己の象徴的な事例が現れているとしている。

セラピストではないわれわれも、こうしたあり方に対しては、程度の差こそあれ共感を覚えるだろう。非西欧社会における感情観との比較人類学的考察から、ルッツは、現代の感情文化——本稿では、ゴードンに倣って、われわれが感情経験に解釈を加える際に知識のストックとして共通に利用しうる解釈図式と定義しておく [Gordon, S. L. 1989]——の特色の一つとして、疎外と対立し、生き生きとした「本当の自己」を表すものとしての感情経験の価値化をあげている [Lutz, C. 1988]。

では、「自分がどう感じているかを知ること」、すなわち、自己が自己感情<sup>(1)</sup>を保持し、そのあり方を知ることが、自己に対してどのような意味をもつのであろうか。本稿の問題設定は、自己が自己像を構成する際の素材としての感情経験のあり方を分析することを通して、従来の自我論において見落とされてきた、感情経験が自我のあり方に果たす役割を提示することにある。

筆者は、このような問題設定を分析するため

には、感情経験を自己が感じなくなっていく「感情麻痺」(emotion numb)という状態が自己の位相に対してもつ意味を、そこに至る相互行為過程を含めて分析する中で、「感じる」と自己との連関の逆照射を通して検討することが有効であると考え。そのための分析対象としては、収容所体験での事例を用いる。その理由としては、従来の全制的施設論で焦点が当てられていない収容者の感情経験を分析することを通して、収容所体験という極限例が、本稿の問いに対してより鮮明な回答を提出してくれると考える点にある。

本稿では、まず、ゴッフマン、並びにその議論を引き継いで展開されてきた全制的施設論を批判的に検討し、それらの議論の中で見落とされてきた感情経験を分析することの意義を確認する。その上で、実際に強制収容所の内部で展開された、自己—他者、自己—自己間という同時相即的な相互行為過程<sup>(2)</sup>を分析することを通して、収容者が、自己並びに他者の感情経験を操作することを通して自己像の維持を試みる、感情経験を巡る戦略的相互行為の一つのあり方が検討される。それから、こうした試みが次第に困難になっていく過程である「感情麻痺」という位相を分析する。その上で、感情経験が自己に対してもつ「存在論的」とも言うべき重要性を指摘する。

## 2) 全制的施設論と感情経験

収容所体験は、ゴッフマンによって、「全制的施設」(Total Institution)での体験の一つとして数えられている。その特徴としては、(1)収容者の日常生活の全局面が同一の場所で同一の権威に従うものであること、(2)収容者の日常生活の各局面が、同じ扱いを受け同じことを一

緒にするように要求されている多くの他人の面前で進行すること、(3)毎日の活動の全局面が整然と計画されているような施設である、という3点があげられている[Goffman, E. 1961=1984. p. 7]。

ゴッフマンが主に精神病院を対象として展開した議論では、こうした特性をもつ全制的施設における収容者の自己の無力化過程と、それに対する収容者の自己を維持する営為に主眼がおかれている。自己を“特定の社会体系において構成員に対して偏在している仕組みの内に存立している”[ibid, p. 177]、すなわち個人が取り結ぶ社会関係における構成物であると捉えるゴッフマンは、上述した特徴をもつ全制的施設では、自己を構成する際に利用される様々な道具立てが収容者から剥奪され、収容者の自己が無力化される過程が進行するとしている<sup>(3)</sup>。

では、この過程はどのように進行するのだろうか。ゴッフマンはこの過程を、(1)全制的施設への収容によるこれまでの社会関係からの遮断、(2)収容時の入所手続きによる変化。自分の氏名の代わりに番号が付され、髪の毛を丸刈りにされ、私物の一切を取り上げられる入所手続きは、自己をこれまでの自己と同一視したり、また他者に対して自己提示したりする際の手がかりとなる「アイデンティティ装置」(Identity Equipment)の剥奪を意味する、(3)その際の屈辱、羞恥等の否定的な感情経験の惹起や、施設職員に対して常に敬意を示し、自己が羞恥を感受する姿が職員のみならずの下におかれることの感受、(4)以上の過程の経験、並びに一連の「特権体系」<sup>(4)</sup>の学習にとまなう、行動の自己決定権が剥奪されていくことの感受、という4つの段階を経るものと捉える[ibid, pp. 14-62]。

これに対する収容者の自己を維持する営為は、

「第二次的調整」と概念化されている。これは、収容時に行われるアイデンティティ装置の剥奪と特権体系の学習により、収容所が収容者に提供する自己に適応する「第一次的調整」に対置される概念である。その内実は、“職員に真向から対立することはないが、収容者には禁じられている満足を得させる、あるいは禁じられている手段によって満足を得させる実際的便法” [ibid, p. 57. 一部改訳]であり、これによって、収容者は、“施設が個人に対して自明としている役割や自己から距離をおく” [ibid, p. 201]ことを通して、“自分は環境を何程か制御できるのだから、また自分自身の主人” [ibid, p. 57]という感覚を得ることができる。つまり、「第二次的調整」とは、上述した無力化過程を通して、収容所が収容者に強いる自己像に対して、収容者自身が確保することを欲する自己像を維持するための営為を通して、自己が自己像を決定し、構成しているという確証を得る営為を指している。

この第二次的調整の実際のあり方について、ゴッフマンはまずそれを、(1)状況からの引きこもり：施設に対して、それが提供する状況定義や自己像のあり方とは異なったパースペクティブをもつこと。(2)妥協の限界点：施設に対して表面的な協力を拒否すること。(3)植民地化：施設から入手できる物品を利用することによって、自己像を維持する営為。(4)被収容者集団への忠誠：収容者間で共謀的なネットワークを作り上げる「裏面生活」において、自己を維持するに足るだけの物品を取得すること、といった類型に区分している<sup>(5)</sup>。その上で試みられている第二次的調整のあり方の記述は、主に、収容者個人、あるいは収容者間相互の協力の上に、(時には施設職員と共謀しながら)、無力化過程において剥奪されたアイデンティティ

装置の回復に焦点が当てられている。具体的には、施設外に一時的に出ることによる日常生活においては自明であった社会的な関係の回復、収容者には通常その保持が不可能である物品の入手・所有、特権体系から一時的とはいえ解放される私的領域の確保、あるいは施設職員との親密化などが記されている。つまり、ゴッフマンにとって、全制的施設とは、施設と収容者間の物質的・空間的なアイデンティティ装置の保持が争点化された場所なのである。

こうした傾向は、ゴッフマンの議論を引き継いだ全制的施設論にもみられる。例えば片桐は、強制収容所を事例とする分析の中で、特に外見に関わるアイデンティティ装置に着目しながら、施設と収容者間の攻防を分析している。彼によれば、“外見の喪失は、いままで自明とされてきた自己を自己として表示する手がかりを失うこと” [片桐, 1996, p. 89]を意味し、これまでの自己像を支えてきた自己-自己関係、自己-他者関係双方の相互行為関係の崩壊を帰結する。これに対して収容者は、収容所からの食料がより多く配給されることによって、血色の良さを保つことや、限られた手段である程度の身だしなみを整えることにより外見を維持することを通して、被収容時以前の自己像を確保することを試みる、とされている<sup>(6)</sup>。

しかし、強制収容所という極限的と言える全制的施設に目を向けるならば、収容者が第二次的調整として、こうした物質的・空間的なアイデンティティ装置を利用することは困難であったと言える。無論、「特権体系」を学習し、施設職員に取り入ることによって、このような条件を安定的に確保する試みを行った収容者も存在するし、しばしば食料や衣料品を盗むことは実際に試みられていた<sup>(7)</sup>。だが、大部分の収容者は、物資・食料品・水の配給が極度に不足

している状況におかれていた。

第二次的調整をゴッフマンが注目してきた側面で論じるならば、このような状況におかれた場合、収容者の自己には、アイデンティティ装置を確保しえないため、無力化が直ちに帰結することになるだろう。しかし、多くの手記の内容、あるいは手記の存在そのものが示しているように、このような無力化が全ての収容者に帰結したわけではない。この事実はどのように説明されるべきであろうか。

アイデンティティ装置の剥奪が、それまでの自己像の崩壊＝自己の無力化を帰結するためには、収容所内における相互行為過程において両者が結びつけられる過程が存在する必要がある。つまり、自己の無力化が貫徹しなかった収容者の存在は、物質的・空間的にアイデンティティ装置の剥奪が貫徹したとしても、それが直ちに自己像の崩壊へと直結しないためのアイデンティティ装置を確保する営為の可能性を示している。

本稿では、このような営為の一つとして、収容者の感情経験に焦点を当てて検討してみたい。こうした観点から、以下、収容者に与えられる感情経験を時間的経過に従って、(1)アイデンティティ装置の剥奪。強制労働による否定的感情の生起。(2)それらに対する感情操作に区分して検討する。

### 3) 強制収容所における感情経験を巡る戦略的相互行為

#### 3) - 1 収容時、強制労働における感情経験

本節では、収容者の感情経験に関して前節末で区分した(1)、(2)の段階について考察する。まず、アイデンティティ装置の剥奪にともなう感情経験についてみておこう。

収容所体験に関する手記に共通して見受けられることは、入所時に収容者のアイデンティティ装置を完全に剥奪する行為がなされる点である。それまでの社会関係の内部で担っていた役割にもとづく呼称・実名の否定がなされ、それを代替する個人の識別指標として、番号が腕に刻印される。入浴を強制され、頭髮を剃られ、共通の衣服を着用させられる。さらに、装飾品、記念品等、自己の所持品を文字通り全て剥奪される。残されるものは、支給された服と、木靴のみである。このような状況が個人の感情経験に与える影響を、ベッテルハイムが観察した地方議員グループの事例を通してみておこう。

親衛隊の新兵が彼らに対して「議員さん」とか、そういう肩書を使わず、「お前」という時、彼らがどんなに大きな打撃をうけたか分かるだろう。さらに悪いことに、彼らはお互いに話をする時にも、その最大の誇りである肩書で呼びあうことを禁じられ、ありきたりの「お前」という言葉を使うように強制されたのである。…そしてこのことは彼らにとっては、自尊心の完全な喪失と同じであって、この為彼らは自立的人間としては崩壊したのである。 [Bettelheim, B. 1962=1975, p. 126]

アイデンティティ装置の剥奪の一貫である自己の名前の剥奪が、これまでの社会関係において呼称で呼ばれる際に地方議員が自明なものとしてきた自己の感情経験、おそらくは「議員さん」という呼称とともに感受されたであろう自尊心が、ナチ親衛隊の新兵の「お前」という敬意がこもらない呼称によって崩壊させられる。この結果、収容者は収容所職員の行為によって惹起される否定的な自己感情である、自尊心の喪失や羞恥といった感情を受容しなければなら

なくなる。こうしたアイデンティティ装置の剥奪は、レーヴィが“そこで私たちは初めて気づく。この侮辱を表現する言葉がないことを。…私たちは地獄の底に落ちたのだ。” [Levi, P. 1947=1980, p. 23]と述べるように、明瞭な言語で表すことができない程の否定的な自己感情を経験させるのである。

このような否定的な自己感情の経験は、親衛隊・カポーとの相互行為、並びに収容者間の相互行為の過程でも生じている。前者の例としては、収容者が親衛隊員の監督の下で行う、過酷で目的意識が見いだせない強制労働、並びに親衛隊員による虐待行為、わずかに支給される食料に貪りつく有様を親衛隊やカポーのまなざしの下にさらされること、等があげられる<sup>(8)</sup>。後者の例としては、劣悪な収容所の環境の中で収容者間でその所持品を盗むことや、ある子供が、自分の父親を庇うことが困難になりつつある時に、その父親が殴打されたり、焼却炉行きのリストに選別される際に感じる安堵感に対する羞恥の経験等があげられる<sup>(9)</sup>。

このような否定的な自己感情を経験することは、自己像をどのように変更させるのであろうか。相互行為場面における感情経験の構成を理論的に検討したクラークは、相互行為場面における自己—他者、自己—自己関係という同時相即的なコミュニケーションで展開される感情経験の感受と表出が、各参加者が相互行為場面で占める自己の位置である「社会的な場」(Social Place)の優位/劣位の感受を帰結すると述べている。彼女によれば、羞恥等の否定的な感情経験を他者に感受させるような感情表出を行うことは、他者の社会的な場の劣位性を確認させる行為であり、それを自己が感受する場合には、自己の社会的な場の劣位性の感受へと結びつく [Clark, C. 1990]。このように、否定的な自

己感情の感受を通して、個人は自己の降下を経験するのである。

入所時におけるアイデンティティ装置の剥奪、親衛隊員による虐待や四六時中の行動の管理による行動の自己決定権の剥奪は、収容者に羞恥等の否定的な自己感情を経験させる一方で、親衛隊員に対する怒りや憎しみ等の感情を経験させる。もし、収容者がこうした怒りや憎しみ等の感情を親衛隊員に表出することができれば、彼らの「社会的な場」の劣位性を解消することもできよう。しかし、当該相互行為場面においてそうした感情を親衛隊員に対して表示することは、さらなる虐待行為につながる。“怒りを当然向けるべきところ、すなわち親衛隊と特権的地位にある囚人に対して向けることは自殺も同然” [Bettelheim, B. ibid, p228]な状況におかれているのだから、親衛隊やカポーの前では“表情を変えることによって感情をあらわにする者は誰一人として”おらず、“必死に涙をこらえながら、無表情をよそおって” [Newman, J. S. 1963=1993, p. 22]いなければならないのである。

### 3) - 2 収容者の感情操作

上述したように、感情経験が自己像のあり方に影響を及ぼすのであれば、否定的な自己感情は否定的な自己像の感受を帰結する。ゴードンによれば、このような場合個人は自己の感情を操作し、否定的な自己感情を中和しようとする [Gordon, S. L. 1981]。また、このような感情操作は、自己が感情を操作する主体であるという感覚、すなわち自己感情の起源感を個人に与えるものでもあるだろう。

この感情操作の手法としてホクシールドは、(1)認知的：感情経験を変えるためにそれに適合したイメージ、理念、状況への志向性——す

なわち、状況の解釈や、注意の対象——を変化させる。(2)生理的：感情経験を変化させるため、飲酒やドラッグを利用したり、リラックスできる環境に自己をおく。(3)表出的：感情経験を変えるために表出動作を変更する、といった3点をあげている [Hochschild, A. R. 1979. p562]。収容所体験においても、収容者は初期にはこうした試みを行い、自己感情を肯定的なものに保つことで自己像の維持を試みる。ただし、収容者は上述した第2の技法を行える環境にはない。そこにみられるのは(1)、(3)の技法だけである。以下、事例を交えながら、まず(3)の技法について考察し、続いて(1)の技法の一般例と、(1)に含まれる、ベッテルハイムが述べる「投影」、「自己犠牲化」について考察する。最後に、フランクルが「無感動」と述べている収容者の感情経験を、感情操作という観点から検討する。

まず、(3)の技法について考察してみよう。フランクルは一連のアイデンティティ装置の剥奪過程後における感情操作の試みを以下のように記述している。

このようにわれわれがまだもつことのできた幻想（収容されないという幻想—引用者註）は次から次へと消えうせていった。しかし、今やわれわれの大部分を襲ったのは全く予期されないものであった。すなわちすてばちなユーモアであった！…シャワーの水が吹き出している間に、われわれは多少ともあれ冗談か、少なくとも冗談のつもりである冗談を言い交わし、自分に対し、また他人に対し陽気になろうと無理に努めたのであった。

[Frankl, V. 1956=1961, p93]

ここでは、“冗談を言い交わし”、“陽気にな

ろうと無理に努める”ことによって否定的な自己感情の否定が試みられている。こうした試みは、収容者間で交わされる、感情経験に関わる言語的・非言語的な表出動作を変更することによって、自己—自己、自己—他者関係における感情経験の構成過程において、当該場面における否定的な自己感情を中和する試みである。

続いて、(1)の技法、すなわち認知的な感情操作の試みの一般例について述べておこう。この種の試みは、収容者による手記に多数散見される。例えば、文学者志望であったクリューガーは、収容時に入れ墨が施された時点での屈辱を、文学的作品に値する経験を得たと解釈し直すことによって、ある種の喜びに転換させたことを記している [Klüger, R. 1992=1997, pp. 137-138]。また、レーヴィは、強制労働の際にしばし休息が取れた際の感情経験について、飢えという大きな苦痛が強制労働の苦痛を緩和している、と感受したと述べている [Levi, P. *ibid*, p. 80]。この種の試みは、自己に否定的感情を与える状況についての解釈を変更し、否定的な自己感情を中和する試みといえるだろう。

次に、(1)の認知的な感情操作の試みの2番目の例として、ベッテルハイムが記述する、投影について検討してみる。まず、これに関するベッテルハイムの記述をみてみよう。

怒りを仲間の囚人に向ければ、それはただ新しい敵意を生むだけだった。いや罪悪感を生みだす場合も多かった。何故なら囚人は誰でも、他の囚人と同じように苦しんでいることを知っていたからである。…囚人は蓄積された攻撃衝動を何とか解放しなければならなかったが、その捌け口はたった一つだけあるといえはいる。それは少数民族グループに対する攻撃である。

[Bettelheim, B. ibid, pp. 228-229]

収容者は、怒りを親衛隊に向けることができず、それを他の収容者に向けることもできない。前述したように怒りを親衛隊に向けることは自殺行為であり、他の収容者に向けることは同じように苦しむ収容者に対する罪悪感という否定的な自己感情をもたらす。このような場合に、怒りの焦点としての注意の対象を変更する感情操作により、その矛先がユダヤ人等の少数民族に向けられる。この操作を合理化する推論は、「人種問題に関する親衛隊の態度を採用する」[ibid, 229]ことによって調達される。ここに生じている現象は、虐待を受けている収容者達が、親衛隊員の態度にみられる民族差別の推論を用いることで、同じ虐待を受けている少数民族をさらに虐待するという、「一つの差別が、他の差別を強化したり、補償したりという複雑な関係にある」[上野, 1996, p. 203]、「複合差別」であるといえる<sup>(10)</sup>。

続いて、(1)の認知的な感情操作の試みの3番目の例として、自己犠牲化という側面に関するベッテルハイムの記述をみてみよう。

一部の囚人は、自分達の受難のおかげで他の人々が助かっているのだから、自分たちは新たに重要な人物になったと感じたが、このことは彼らが自己の人格を守る一つの方法であった。…多くの囚人は、この他人のために苦難の道を歩まねばならないのだということを利用して、収容所内での自己の反社会的行動についての罪悪感を和らげ、また収容所の耐えがたい生活条件を利用して、自己の反社会的行動を合理化した。その例は、囚人が不行跡で非難された場合にしばしば見受けられた。例えば、他人をだましたとか、殴ったと

か、卑猥な話をしたとか、汚いとか、だらしがないなどといって非難された囚人の典型的な答えは、「こんな環境では、普通でないのがあたりまえだ。」という返答であった。

[Bettelheim, B. ibid, pp. 201-202]

「受難」という言葉に示されるように、状況への解釈を変更するという感情操作の一技法によって、収容者は収容体験がもたらす否定的な自己感情を中和しようと努める。それと同時に、同じ「受難」という言葉によって、通常の市民生活においては他者に否定的感情を喚起させるため、他者から非難される行動を正当化する。また、前述したように、他者に否定的な自己感情を喚起させることは、自己の社会的な場を高める効果がある。収容者達は、否定的な自己感情を喚起させる親衛隊員の社会的な場の優位を絶えず確認させられる状況で、「受難」という言葉を用いることによって否定的な自己感情を中和させるとともに、他の収容者に否定的な自己感情を喚起させるような行動（例えば殴打や卑猥な話等）をとることによって、自己の社会的な場を、例え収容者仲間という限られた範囲内ではあっても高める行動をとっているのである。

最後に、フランクが述べる、「無感動」という状態について検討しておこう。この状態についてフランクは、収容所体験が長期化する中で、他の収容者に対する虐待、病者の酷使、凍傷にかかった足の指をピンセットで引き抜くという病者に対する不適切な処置、発疹チフスにかかって死につつある他の収容者に対する無関心の蔓延を描写した上で、以下のように述べている。

この瞬間、眺めているわれわれは嫌悪、戦

慄、同情、興奮、これら全てをもちや感じる  
ことができないのである。苦悩する者、病む  
者、死につつある者、死者—これらすべては  
数週の収容所体験の後には当たり前の眺めに  
なってしまう、もはや人の心を動かすこと  
ができなくなるのである。

[Frankl, V. *ibid*, p. 102]

この種の感情が鈍麻した状態は、収容所から  
生還しえた収容者の手記に共通してみられる感  
情経験である。例えばハートは、焼却炉のすぐ  
そばで労働していた際の感情経験を、「私たち  
の無感覚という殻」という言葉で表現している  
[Hart, K. *ibid*, pp. 201-204]。また、レーヴィは、  
強制収容所から解放される知らせを受け取った  
際の感情経験について、“生き生きとした感情  
はいささかも湧いてこなかった。もう何ヶ月も  
私は、苦痛、喜び、恐れを感じてこなかった。  
あのラーゲル（収容施設のこと—引用者註）に  
特有の、距離のあるよそよそしい感じ方しか味  
わってこなかった” [Levi, P. *ibid*, p. 188]と述べて  
いる。

しかし、無感動と呼ばれる状態におかれた収  
容者達も、四六時中そのような状態にあったわ  
けではない。例えば、親衛隊員の前では感情表  
出を抑えながらも、親しい収容者間でユーモア  
を保つことを試みている。このような営為によ  
って、収容者は、“彼が存在することが…外に  
はまだ正しい世界があり、純粹で、完全で、墮  
落せず、野獣化せず、憎しみと恐怖に無縁な人  
や物があるということを、いつも思い出す”  
[Levi, P. *ibid*, p. 149]ことを通して、否定的な自  
己感情を中和し、自己像を保持する。また、自  
己の内的な対話において親しい家族・恋人等と  
の想像上の対話を行う例 [Newman J, S. *ibid*,  
Frankl, V. 1947=1961]、神との想像上の対話を

行う例 [Frankl, V. *ibid*]も存在する。こうした内  
的な対話も、前述したものと同様な効果を自己  
に与える。

生還しえた収容者は、フランクが「無感動」  
と呼ぶ感情経験に四六時中おかれていたわけ  
ではない。むしろ、収容者達は、“不正に、また  
訳もなく、そういうこと（虐待行為のこと—引  
用者註）をされることへの反感がこの瞬間、一  
層苦痛であった。” [Frankl, V. *ibid*, p. 104]とい  
う記述に示されるように、これまでの収容所体  
験において親衛隊員によって否定的な自己感情  
を与えられ続けられた結果、虐待が行われてい  
る当該場面において、自己感情を「何も感じな  
い」感情経験だと解釈することによって、仮に  
親衛隊員に怒りを感じてもそれを表出しえない  
という抑圧感を回避することができる。また、  
それ以外の場面（例えば、収容者間での相互行  
為の場面）において何らかの感情経験を保持す  
るという戦略をとることができる。事実、フラ  
ンクルは、“以前囚人を怒らせたり絶望させたり  
したものは、第2段階では囚人が自らの回りに  
巡らした装甲によって跳ね返されてしまうの  
であり、この無感動はいわば心の自己防衛の機  
制” [Frankl, V. *ibid*, pp. 108-109]であり、“この  
無感動こそ、当時囚人の心を包む最も必要な装  
甲” [Frankl, V. 1956=1961, p. 104]と述べている。  
また、レーヴィは、“ラーゲルでは考えること  
は役に立たない。それに危険でもある。苦痛の  
源である感性を生かしておくことになるから  
だ。” [Levi, P. *ibid*, pp. 214-215]と述べ、ハート  
は、“鈍感で結構なのだ。感受性は拘禁期間中  
はしまい込んでおくべきものであった。” [Hart,  
K. *ibid*, p. 125]と述べている。こうした記述に  
示されるように、収容者の自己感情は、親衛隊  
員が参与する相互行為場面において「何も感じ  
ない」感情経験であると解釈されているのであ

る。

むしろ、“肉体の破壊を通じて、また思想を含めた人間の精神への直接的加害行為を通じて、拘留者の「内面」を破壊すること” [篠田, 1992, p. 59]が目的である収容所において、ある収容者が“われわれの感受性はきわめて弱められていた。さもないと、われわれは、友人が、良き仲間が、あるいはただ単にひとりの人間が苦しんでいくのを見るこれほど多くの機会を前にして、抵抗することはできなかったであろう。” [篠田, ibid, pp. 62-63]と述べるように、こうした状態に至ることは生還する条件の一つであるといえる(11)。

これまでみてきた様々な感情操作の技法は、アイデンティティ装置が剥奪された状況においてなお、否定的な自己感情を中和し、自己感情の起源感を確保することを通して、自己像を維持する試みであるといえるだろう。ゴッフマンにおいては、アイデンティティ装置を巡る攻防の分析は、収容所組織内の物質的・空間的なものに視野が限定されているが、こうした感情操作の試みも、親衛隊－収容者間の関係性の非対称性等から前提とされる否定的な自己感情＝否定的な自己像の受容を回避し、そこから距離をおき、自己像を保つ試みといえるのではないだろうか。収容所という物質的・空間的なアイデンティティ装置が不足し、かつその保持を巡る攻防への参加が困難である状況下では、自己の感情経験のあり方は、操作可能なアイデンティティ装置として機能していたのである。

以上、本節では、収容所の相互行為過程において収容者に強いられた、否定的な自己感情の経験と自己像の降下、並びにそれを中和しようとする収容者の感情操作の試みを示してきた。しかし、ここで注意しておかなければならないことは、感情操作の連続によって、自己の感情

経験が「もともと自己がもっていたもの」と「操作化して作り出されたもの」とに分離されるより、自己像と感情経験の連関が薄らぎ、自己感情への起源感が希薄化する結果、感情操作への無力感を帰結することである。

こうした点については、ホクシールドが、フライト・アテンダント(＝スチュワーデス)を対象とした調査の中で、感情操作の否定的な効果として指摘している。彼女は、感情操作を、感情経験の表出を操作する「感情ワーク」(emotion work)、自己の内的な感情経験を操作する「感情管理」(emotion management)とに区分する。彼女によれば、通常、個人は感情ワークを行うことによって自己の内的な感情を保護すること、あるいは感情管理を行うことによって、自己の内的な感情を相互行為場面やあらかじめ抱かれている自己像に適合的なものに保つことができる。しかし、フライト・アテンダントは職場において感情操作を連続的・強制的に行わざるをえない。例えば、旅客に対する「心からの」笑顔や、客室内で神経質になっており、ささいなことに腹を立てる旅客に対するにこやかな接客、というフライト・アテンダントに課される業務が、こうした側面を良く表しているだろう(12)。このことは、本稿のこれまでの用語に従うならば、フライト・アテンダントにとって感情経験は、アイデンティティ装置としての比重が高いことを意味する。この結果、感情操作の否定的な効果がフライト・アテンダントに現象する。その否定的な効果の内容とは、操作された感情経験と自己感情を一致させようとすればする程、感情操作によって表出され、内的に維持された感情経験と保護されていた自己感情との区分が曖昧になることによって、自己がその感情経験から疎外され、自己感情の非現実感を受感する、というものである(13)。その

結果、フライト・アテンダント達は、感情操作の否定的効果を対自化することを通して、感情操作への無力感を受感するに至る [Hochschild, A, R. 1983. pp. 187-198]。つまり、感情操作が連続的・強制的に行われると、それまでは保たれていた、「操作化された感情経験」と、「内に保護されていた感情経験」との分離を成立させることが困難になり、両者のいずれが「本当の」自己感情であるかという感覚の喪失、すなわち自己感情への起源感の喪失が現象してしまうのである。

フライト・アテンダントという。感情経験をアイデンティティ装置とする度合いが比較的高い職種を調査した結果から、ホクシールドは上述した感情操作の否定的な効果を述べている。一方、本稿でこれまで述べてきたように、収容者にとって、感情経験は収容所で残された唯一のアイデンティティ装置といっても過言ではなく、収容者が、フライト・アテンダントよりも感情経験をアイデンティティ装置とする比重はさらに高いだろう。この事実をホクシールドの見解と照らし合わせてみるならば、収容者には、感情操作の否定的な効果がフライト・アテンダントにも増してより強く現れると考えられる。

強いられた感情操作の連続によって、収容者の自己感情への起源感の希薄化が進行することを通して、感情操作への無力感を受感すること。これが、次節で述べる「感情麻痺」へと至る道である。次節では、感情麻痺という状態を、感情操作という試みの挫折と無力感の昂進という視点から検討し、感情経験が自己の構成作業に対してもつ意味がさらに分析される。

#### 4) 「感情麻痺」という感情経験

収容体験の初期段階では、圧倒的な劣位性が

すでに相互行為場面の社会的文脈として存在している収容所において、収容者はこれまで述べてきたような試みによって否定的な自己感情を中和しようとする。しかし、収容体験が長期化し、自己の無力化過程がいよいよ進行すると、収容者はこのような試みを止め、ついには「感情麻痺」(Frankl)、「回教徒」<sup>(14)</sup> (Bettelheim)と呼ばれるような状態に至る。ベッテルハイムは、この段階について以下のように記述している。

囚人の心の中に感情を呼び起こすことができなくなった時、その囚人は回教徒の段階に入ったのである。回教徒といえども、最初しばらくの間は、食事を得ようと努めるが、数週間すると、それさえ口にしなくなる。…彼らは、人間崩壊の最終段階に達しないうちは、食物を受け取るが、食物はただ彼らの胃に入るのみで、もはや彼らの心に感情を蘇らせるようなことはない。状態がさらに悪化すると、食物は受け取るが、食べる時もあり、食べない時もあるようになり、さらになんの感情的反応も示さなくなる。

[Bettelheim, B. *ibid*, p. 165]

ベッテルハイムは、感情麻痺＝回教徒が死に至る理由を、自己の感情を変えうるという最後の一線の放棄であるとする。“感情を変える自由、これもまた囚人をして人間であり続けることを可能にするものであった。囚人を回教徒に変えたのは、行動に関する一切の感情、一切の内部留保の放棄であり、最後の一線の放棄” [ibid, p. 167] なのである。この感情麻痺状況に陥った収容者は、レーヴィが“心の中の聖なる閃きはもう消えていて、本当に苦しむには空っぽに過ぎる” [Levi, P. *ibid*, p. 107] と述べている

ように、少なくとも外部視点からは、どのような感情経験についても、それを自己が保持しているという感覚が失われている状況に見える。本稿では、このような状態を感情麻痺と規定しておく。

このような状況に陥った収容者は、ベッテルハイムが述べるような衰弱死、あるいはヴァーゼルが述べているように「焼却炉」への選別対象へと直ちに振り分けられていく [Wiesel, E. 1958=1968]。そのため、感情麻痺という状態に関する内部視点からの記述は存在しないが、ベッテルハイムは、この状態に陥った収容者に関して、外部視点からの記述を行っている。その中で彼は、感情麻痺に至った収容者が辿っていった過程を、(1)肉体的・精神的な疲労困憊から、自身の行動が外的環境、並びに自己像に影響を与える意図的な行動の停止。(2)それを目撃した周囲の収容者が、こうした態度が自己に伝染するのを回避するために彼らとの接触を断つ。(3)その後、感情麻痺に陥った収容者は、周囲の環境や自己像に影響を与えうる行動を完全に停止し、外的な刺激にも反応を及ぼさなくなる、といった3つの段階を経るものとして記述している [Bettelheim, B. ibid, pp. 160-168]。この感情麻痺に陥る過程の外部視点からの記述を元に、感情麻痺に陥っていった要因を感情操作の挫折という観点から分析してみたい。

感情操作が挫折する要因として、ミルズは、夫から虐待された妻が感情麻痺へと陥っていく過程を分析する中で、自己感情や自己像を操作することへの無力感から、それを放棄するという要因をあげている [Mills, T&Kleinman, S. 1988]<sup>(15)</sup>。またトイツは、個人が感情操作を持続的に強いられる状況におかれた際に生じる、当該の個人の自己感情に対する否定的な効果(自己感情からの疎外や、無力感等)を和らげ

る支持集団の欠落をあげている [Thoits, P. 1985, 1990]<sup>(16)</sup>。ベッテルハイムが感情麻痺に至る第1段階で述べている収容者の状態は、まさにミルズが指摘する条件に合致しており、肉体的・精神的な疲労困憊から、自己感情の操作を放棄した段階にあると考えられる。

そうした状況を目撃した収容者は、ベッテルハイムが感情麻痺に至る第二段階として述べているように、彼らとの接触を断つ。その理由には、以下の2つがある。(1)ハートが“生き続けることは努力に値しない人から離れていること。絶望は伝染しやすかった。絶望は人を回教徒に変えるのだ。” [Hart, K. ibid, p. 171]と述べているように、感情麻痺に陥った収容者は、生き延びる努力を放棄し絶望に至ったとする否定的評価と、そうした態度に自己が「汚染」されることからの回避。(2)レーヴィが、“友達になっても全く無駄だ…何週間かしたら近くの収容所で一握りの灰になることが分かっているからだ。” [Levi, P. ibid, pp. 105-106]と述べているように、感情麻痺に陥った収容者には死が待っている以上、他の収容者にとって支持集団とはなりえないという認識。以上の2つの理由から、感情操作の否定的効果を和らげることができた支持集団が欠落する。

その結果として、感情操作を可能にする要因を失い感情麻痺に陥っていった収容者の内的世界のあり方は、自己感情・自己像に対する絶望と深い無力感であったといえるだろう。何故ならば、彼らは自己感情を操作化して自己像を保つことを放棄しており、また、感情麻痺の前段階においては支持集団であった周囲の収容者は、上述したように、「感情麻痺」という状態に陥ることに對しては否定的な態度を示していたからである。この結果、感情麻痺に陥った収容者は、自己感情や、それにもとづく自己像に

定位することはできない。そこから、“ちょうど死の収容所の囚人と同様、敵意を自己に向ける” [Bettelheim, B. *ibid.*, p. 264] ような絶望へと至り、自己感情に対する意識作用を極度に弱めていったのではないだろうか。つまり、「感情麻痺」という状態は、外的な感情表出・並びに内的な自己感情から、自己が完全に疎外された状態であると言えるのではないだろうか。

収容所においては、“あらゆる自己決定行為は厳しく罰せられなければならない” [Todorov, T. 1991=1992, p. 73] の中で、自己の感情経験を決定し保持することに繋がる行為、並びにそこから自己像を構成する作業だけは、親衛隊員等に「見えない」ものであるために、収容者に唯一与えられたものである。ハートは、この種の行為がもつ意味に対する絶望感が、収容者を感情麻痺に至らせるとしている。[Hart, K. 1981=1983, p. 171] そして、この絶望感・無力感から、感情経験を保持する営為を放棄することによって、収容者は自己像を維持する作業の放棄へと至るのである。

## 5) 結語

収容所体験を用いた事例研究から、本稿の結論として以下のことを指摘したい。

収容所においては、収容者は、物理的・空間的なアイデンティティ装置を剥奪される。さらに、親衛隊員と収容者間の相互行為では圧倒的な関係性の非対称性が前提として存在するため、収容者には、否定的な自己感情の経験が強要される。

こうした状況の中で収容者は、残されたアイデンティティ装置としての自己感情を操作し、否定的な自己感情を中和することを試みることを通して、自己像の維持を試みる。しかし、感

情操作への無力感からこの試みを止めた場合、収容者は感情麻痺という状況に陥る。この段階に至っては、収容者は残されたアイデンティティ装置としての自己感情から完全に疎外され、自己像を維持することが困難になっている。自己感情と自己との結びつきが保たれ、感情経験を自己像の構成に利用できるか否かという点は、収容者にとってはその自己像に対する自己起源感を担保しうるか否かという問題に直結するとともに、さらには生死を分かťほどの重要な要素であった。

サルトルは、自己感情を経験することがわれわれに対してもつ意味を、それを手がかりにすることによって、われわれと周囲の世界との関係性、あるいは自己像を理解することに求めている [Sartre, J. P. 1939=1962]。また、 فرانクルは、“人間は「心情の論理」から現実においては常に、喜びあるいは悲しみの興奮であれ、絶えず心理的に「生き生き」としていることに努め、無感動に陥らないようにしている。” [Frankl, V. 1952=1957, p. 127] と述べる。現代の感情文化の枠組みの中に生きるわれわれが、自己像を構成する、あるいは自己と世界との結びつきを確認する手段として、自己感情を経験することは、自己の「存在論的な安定」(17) に不可欠のものであると言えよう。

こうした感情経験と自己像との連関性には、感情社会学者が述べるように、現代社会が「エモーショナル・コンシャスな社会」 [Maccarthy, E. D. 1989, p. 63] であることによる否定的な側面があることは否めない(18)。しかし、本稿で検討してきたように、自己感情を経験しえない感情麻痺という状況、「感情的な死」は、自己像を構築する作業を不可能にする。現代の感情文化の中に生きるわれわれにとって、「エモーショナル・コンシャス」であることと、それが

もたらす否定的な作用との折衷点をどこに見いだすか、という課題については別稿を期したい。

#### 註

- (1) 本稿では、相互行為論的視点に立ち、自己—他者の相互行為過程において自己が自己に対して抱く感情経験を「自己感情」(self-emotion)とするデンジンの用語法 [Denzin, N. 1984]をふまえ、自己感情という用語を用いている。
- (2) 本稿では、相互行為過程を、ブルーマーが述べているように、自己—他者関係のみならずそれを内部に織り込んだ自己と自己との相互行為をも含んだ、自己—他者、自己—自己間の同時相即的なコミュニケーション過程と捉えている [Blumer, H. 1969=1990]。
- (3) 本稿でも、ここで引用したゴッフマンの議論に準拠した形で、自己という用語を用いている。
- (4) 特権体系とは、全制的施設における一連の規則とその違反に対する処罰の体系であり、その規則とは、通常の生活において自明とされる権利を規制するものである。
- (5) 無論、ゴッフマンの視座がこのようなものだけに限定されていたわけではない。彼は、全制的施設における収容者の無力化過程を、自己がその行動、感情経験の表出を決定していくことが困難になる過程とも述べている [Goffman, E. 1961=1984, pp. 45-46]。また、本稿で述べられている感情経験に関する分析としては、「気晴らし」等の事例があげられている。しかし、ゴッフマンはこうした感情経験を第二次的調整の機能と指摘するのみであり、感情経験を保持し、操作することそのものを第二次的調整とは見なしていない。
- (6) 他には、ゴッフマンの「アサイラム」における議論と、儀礼的秩序論との異同を分析した藤沢の議論も、全制的施設を物質的・空間的な「アイデンティティ装置」の攻防の舞台としている。[藤沢

1988]

- (7) 実際多くの手記において、収容者自身や周囲の人間の環境を少しでも良くするために、このような行動を行ったことが報告されている [Hart, K. 1981=1983, Kluger, R. 1992=1997]。
- (8) レーヴィは、以下のように述べている。“いつものように、カポーは私たちの食欲をあざ笑い侮辱する。だが…良く見張ることは忘れない。” [Levi, P. 1947=1980, p. 81]
- (9) ヴィーゼルは、父親が親衛隊に殴られた様を見た際の感情経験を以下のように記述している。“見ている前で、いま父が殴られたのだ。ところが私は、眉一つ動かさなかった。…いまや後悔の念が私の胸を触り始めていた。” [Wiesel, E. 1958=1967, pp. 70-71]
- (10) 上野は、差別が複数に折り重なっている状態を、単一の差別化基準が複数の領域に適用される「単層差別」、複数の差別化基準が重層化し蓄積される「重層差別」、重層差別の中に差別化基準の適用に関するねじれが存在する「複合差別」に区分する [上野. 1996. p. 219]。本文中の事例は、収容時の差別化基準によって収容された者が、少数民族という基準でその一部を差別するという点で重層差別にも見えるが、少数民族を差別する際の基準は、収容時に差別化基準を適用した親衛隊、ナチの論理を援用している。この点で、複合差別というねじれが生じている。
- (11) 実際、収容所においては否定的自己感情や、本節で述べたような情景を前にして、自死へ至った者が多数存在するとされている [Todorov, T. 1991=1992, 篠田. 1992]。
- (12) ホクシールドは、彼女が調査したデルタ航空におけるフライト・アテンダントの客室内サービス業務を、他の航空会社と比較しつつ、「家庭的な雰囲気」を醸し出すための感情ワーク、感情管理が他の航空会社にも増して強制されるものであると

述べている。[Hochschild, A. R. 1983]

- (13) ホクシールドは、感情操作のもう一つの否定的側面を指摘している。それは、感情経験をアイデンティティ装置として比較的重視しないパーソナリティの人でも、感情操作によって作り出された感情経験は、労働の要請に従った「幻影」の感情経験であり、そこからフライト・アテンダント達は、真正性 (authenticity) を欠き、誠実性 (sincerity) を欠く否定的な自己像を構成すると共に、操作された感情経験とは反対の感情経験を反転的に自己の「本当の」感情経験として感受する、というものである [Hochschild, A. R. 1983. pp. 187-198]。例えば、ささいなことに腹を立てる旅客に対しても笑顔を表出する際に、それを欺瞞ととらえ、そこから真正性と誠実性を欠いた自己像を構成する。それとともに、操作されて表出した「笑顔」と反対の、その旅客への嫌悪感を自己の「本当の」感情経験と反転的にみなす場合がこれに当てはまるだろう。
- (14) 「回教徒」という言葉は、本稿が定義する感情麻痺状態にある収容者を指し示す収容所における隠語であり、手記の中に散見される。
- (15) 一方でミルズは、夫に虐待された妻が陥っている感情麻痺状態を、妻の諦念に基づいた意識作用が低下しつつも、自己の感情性は意識されないまま高いものに保たれている状態であるとしている [Mills, T&Kleinman, S. 1988]。しかし、本文中で述べたように、感情麻痺という状態は、感情経験に対する意識作用が極度に低下しているのみならず、自己の感情性も極度に低下した状態にあると考えられる。
- (15) 一方でトイツは、感情麻痺に至る経緯を、“所与の状況において期待されるものとは異なる感情経験並びにその予期” [Thoits, P. 1990. p. 181] である

「感情逸脱」の自己レイベリングが貫徹する過程として説明している。その内容は、(1) 構造的に感情逸脱を感受することが持続する状況に個人がおかれ、(2) その個人の周囲に、感情逸脱が自己の欠陥によるものではないことを確信させる支持集団が存在しない際、(3) 個人は、「感情逸脱」カテゴリーを自己に適用する、というものである。その際の感情逸脱カテゴリーの内容についてトイツは、「精神病の診断上の整合的マニュアル」(DSM-III) が感情麻痺を精神病の重要な指標にあげていることや、感情逸脱にある者は精神病にあり、自己像の構成・提示が不可能であると他者に見なされるというプグリーシの知見 [Pugliesi, K. 1987. pp. 84-90] から、精神病と同一のカテゴリーであるとしている。

しかし、本文中で述べたように、感情麻痺に陥った収容者は、自己感情に対して「感情逸脱」というレイベリングを行っているというよりは、自己感情を失った状態にある。佐藤が述べるように、自己「レイベリング」という現象は、他者からの否定的なラベルを自己-自己関係という相互行為過程において付与するという契機が含まれている必要がある。また、自己レイベリング論の知見にもとづくならば、自己レイベリングの貫徹は、「感情逸脱者」という自己像を帰結するものであり、直裁的に感情麻痺を帰結するとは考えにくい [佐藤. 1994]。

(17) ここでは存在論的安定という言葉で、自己が自己像を自律的に保持しえない状態を「存在論的不安定」と規定するレインの議論 [Laing, R. D. 1969=1971] に即して用いている。

(18) この点に関する詳細な議論は、拙稿 [崎山. 1997] を参照されたい。

## 参考文献

- Bellah, R. N. et al. 1985. *Habits of Heart*, University of California Press=1991. 島園進・中村圭志訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房
- Bettelheim, B. 1962. *The Informed Heart*, Free Press. =1975. 丸山修吉訳『鍛えられた心—強制収容所の心理と行動』法政大学出版局
- Blumer, H. 1969. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Printece Hall=1990. 後藤将之訳『シンボリック相互作用論：パースペクティブと方法』勁草書房
- Clark, C. 1990. "Emotion and Micropolitics in Everyday Life: Some Patterns and Paradox of Place" in Kemper, Th. D. (ed.) *Research Agenda in the Sociology of Emotion*, State University of New York Press. pp. 305-334
- Denzin, N. 1984. *On Understanding Emotion*, Jossey-Bass Publisher
- Frankl, V. 1947. *Ein Psycholog Erlebt das Konzentrationslager*, Verlag für Jugend and Folk=1961. 霜山徳爾訳『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房
- . 1952. *Aerzliche Seelsorge*, Aufl=1957. 霜山徳爾訳『死と愛—実存分析入門』みすず書房
- 藤沢三桂. 1988. 「ゴッフマンにおける儀礼侵犯の問題」『ソシオロジ』No. 33-1, pp. 77-94
- Goffman, E. 1961. *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Others Inmates*, Doubleday Anchor=1984. 石黒毅訳『アサイラム—施設収容者の日常世界』誠信書房
- Gordon, S. L. 1981. "The Sociology of Sentiment and Emotion", in Rosenberg, M&Turner, R(eds.) *Social Psychology*, Basic Books Inc, pp. 562-592
- . 1989. "Institutional and Impulsive Orientation in Selectively Appropriating Emotions to Self", in Frank, D. D & Mccarthy, E. D. (eds) *The Sociology of Emotion*, JAI Press, pp. 115-135
- Hart, K. 1981. *Return to Auschwitz*, Atheneum=1983. 吉村英朗訳『アウシュヴィッツの少女』時事通信社
- Hochschild, A. R. 1979. "Emotional work, Feeling rules, and Social Structure", *A. J. S.* No85, pp. 551-575
- . 1983. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press
- 片桐雅隆. 1996. 『プライバシーの社会学—相互行為・自己・プライバシー』世界思想社
- Klüger, R. 1992. *Weiter Leben*, Westein Verlag=1997. 鈴木仁子訳『生き続ける—ホロコーストの記憶を問う』みすず書房
- Laing, R. D. 1969=1971. *The Divided Self*, Tavistock Publication=1971. 阪本健二他訳『引き裂かれた自己—分裂病と分裂病質の実存的な研究』みすず書房
- Levi, P. 1947. *Se Questo E'un Uomo*, Einaudi=1980. 竹山博英訳『アウシュヴィッツは終わらない—あるイタリア人生存者の考察』朝日新聞社
- Lutz, C. A. 1988. *Unnatural Emotion*, University of Chicago Press
- Maccrthy, E. D. 1989. "Emotion are Social Thing", in Frank, D. D&Maccrthy, E. D. (eds.) *The Sociology of Emotion*, JAI Press. pp. 51-72
- Mills, T&Kleinman, S. 1988. "Emotions, Reflexivity and Action: An Interactionist Analysis", *Social Force*, No. 66-4, pp. 311-329

- Newman, J. S. 1963. *In the Hell of Auschwitz*, Emposition Pro of Florida=1993. 千頭宣子訳『アウシュヴィッツの地獄に生きて』朝日新聞社
- Pugliesi, K. 1987. "Deviation in Emotion and the Labeling of Mental Illness", *Deviant Behavior*. No8, pp. 79-102
- 崎山治男. 1997. 「感情経験と自己」『現代社会理論研究』7号, pp. 113-130
- Sartre, J. P. 1939. "Sketch for a theory for a Theory of Emotion"=1962. 今井・竹内訳「情緒論素描」『サルトル全集第23巻一哲学論文集』人文書院, pp. 276-329
- 佐藤恵. 1994. 「社会的レイベリングから自己レイベリングへ」『ソシオロギス』No. 18, pp. 79-93
- 篠田浩一郎. 1992. 『閉ざされた時空—ナチ強制収容所の文学』白水社
- Todorov, T. 1991. *Face à L'extreme*, Seuil=1992. 宇京頼三訳『極限に面して—強制収容所考察』法政大学出版局
- Toits, P. 1985. "Self-Labeling Process in Mental Illness", *A. J. S.* No. 92, pp. 221-250
- . 1990. "Emotional Deviance" in Kemper, Th, D. (ed). *Research Agenda in the Sociology of Emotion*, State University of New York Press, pp. 180-205
- 上野千鶴子. 1996. 「複合差別論」『岩波講座 現代の社会学15・差別と共生の社会学』岩波書店, pp. 203-232
- Wiesel, W. 1958. *La Nuit*, Les Edition de Minuit =1967. 村上光彦訳『夜』みすず書房

(さきやま はるお)

◎哲学／反哲学  
◎現代思想  
◎社会学

理論社会学、比較社会学、社会システム論、社会情報学、情報理論、メディア論、文化社会学、カルチャー・マテリアリズム、メディア・アクティヴィズム、自己組織化(自己組織性)、可能世界論、数理社会学、ゲーム理論、社会的選択理論、言語哲学、分析哲学、法哲学、応用倫理学、構造主義／ポスト構造主義、現象学(現象学的社会学)、エスノメソドロジー、社会学の古典、ルーマン、フーコー、ヴァイトゲンシュタイン、文化人類学、民俗学、宗教学、東洋思想、数学、その他社会学周辺。

◎サブカルチャー◎カウンターカルチャー  
◎まんが◎幻想文学◎芸術書

Wonderland そして/または 資料集蔵体  
**古本** スコブル社  
3332-3056 [TEL&FAX]  
東京都杉並区西荻南2-19-5 (〒167)

住所・氏名・電話(FAX)・E-mailアドレス等、お知らせ下さい。

ソシオロギス誌上や、社会科学者のための古典研究会・言語研究会等で採り上げられる文献は高く買います。(まんがも)

洋書につきましては、社会学分野洋書カタログ『ソシオ・バック5000』(紀伊國屋書店発行/非売品)等に掲載のものは高く買います。

弊社取り扱い書籍・文献・資料等の目録を発行予定。ご希望の方は、

あなたの本、高く買います。

価値。

and/or

